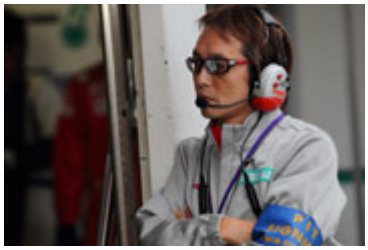
1. タイトル獲得に向けて始動！

今シーズン銅牆鉄壁（どうしょうてっぺき）、国内屈指の名門チーム、TOM'S　の今回のレースウイークを振り返ってみよう。

◆金曜日

早朝にトムス御殿場工場を出発し、サーキットにて設営作業をするチームクルー。二台のクルマは、工場にて“もてぎ仕様”にセットアップされ、持ち込まれる。夕方設営作業も落ち着いた頃になると、ドライバー二人が姿を見せた。
エンジニアとそれぞれやりとりもあり、また中嶋選手は、メディアの取材対応に追われていた。

◆エンジニアに聞く



東條エンジニアに週末の展開を聞いた。「いつも通りのことを、いつ通りにやる。明日の予選は、ポールポジションを獲得して、前に二台を並べ、決勝レースではスタート１周でチャンピオンを決めたい」と、大仕事の割には淡々と語ってくれた。抜きどころの少ないツインリンクもてぎ、確実にチャンピオンを獲得するには、予選上位につける事は必至。なおかつ、ポールトゥウィンをあっさり公約してくれた。
普段から、謙虚で飾らない性格、レースの話も等身大で、とても気さくに話してくれる東條チーフエンジニア。今季もトムスの二台、３６，３７号車を共にまとめ、SUPER GT

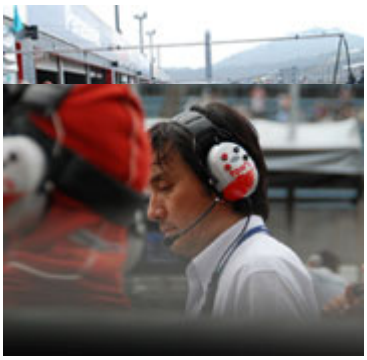
でもエンジニアを務める。そしてそれを支えるのが、37 号車担当小枝(さえだ)エンジニアとデータの解析も担当する横里(よこざと)エンジニア。舘監督のもと、チームスタッフ、メーカーのエンジン担当のスタッフと共にレースを戦っているのだ。
さて、前述の公約に繋がる自信の根拠を探ってみよう。

今シーズンのこの TOM'S の好調ぶり、どこでどう予想したのか？　東日本大震災でスケジュール変更となり初戦となった鈴鹿サーキットでの「優勝」がそう思わせたのだろうと普通は思う。しかし、そうではなく、2010 年 11 月に開催された“ JAF Grand Prix Fuji Sprint Cup 2010 ”で手ごたえを感じたそうだ。二日間に渡り 2 レース開催された訳だが、ロッテラー選手は後続を全く寄せ付けない速さで、２戦とも優勝を遂げている。第１レースに関しては、TOM'S のワンツーと圧勝。戦績と後続とのギャップは TOM'S のクルマの速さを物語っていた。東條エンジニアは、この時に今季の展望が既に見えていたようだ。しかし、改めて驚く事だが 7 戦中 5 戦も制す偉業を達成するとは、誰が想像したことだろう？

小枝エンジニアにも話を聞いた。彼は、フォーミュラ・ニッポンのエンジニアのキャリアは、４年となる。ちなみに東條エンジニアは、参戦２年目からの担当で５年目だ。
「このクルマになってから、TOM'S としてこれまでやって来たことがすべて反映されたシーズンだったと思う。全体的には、とても苦労したと自分では思っているが、みんなの力でチームタイトルも獲得し、ドライバーズタイトル争いもできている。あらゆる事をチーム全員でサポートし、みんなで戦う、このトータルの力が発揮されたのが、今シーズンなんだと思う。元 F１ドライバーの中嶋選手のシートが決まっても誰が来ても自分たちは、“ いつもの仕事をいつものように精一杯やるだけ ”」と…。自身もまだまだ勉強中と語る小枝エンジニアは、これまでフォーミュラ３、SUPER GT のエンジニアも経験済、これからの TOM'S の将来を背負って立つエンジニアなのだ。入社してすぐエンジニアに抜擢され、その後 2008 年のシーズンから彼のレースキャリアはスタートした。右も左もわからず、雲をつかむような状況だったと語るが、とにかく研究熱心で、今でもどの現場にも足を運んで勉強がしたいという。中嶋選手の良いところをもっと引き出してあげるのが自分の役目なのだが…と常に慎ましい。

2009 年に入社した横里エンジニア。途中からレース部門に変わり、東條エンジニアを支える存在となった。
彼も、小枝エンジニア同様、研究熱心だ。彼は、SUPER　GT でもエンジニアを務め、現場で活躍している。探究心の旺盛な若手エンジニアをチームで育成し戦っているのだ。
他にも、このカテゴリーに参戦当初 36 号車ロッテラー選手のエンジニアを務め、

初シーズンでありながら２勝もあげ、フォーミュラ３でこれまで幾度も世界の大舞台を制ししたチームのフォーミュラ部門を束ねている山田淳エンジニアの存在も忘れてはならない。それも考慮すると、日本のレース業界の老舗が、これから先もクォリティをそのままに君臨していく準備をしっかり整えている事が見て取れる。



メカニックたちに話を聞いても、“いつも通りのことをいつも通りに”と答える。実はこれが一番容易に見えて、大変難しいのではないかとも思った。ルーティンのピット作業であれ、緊急ピットインであれ、迅速な判断と作業を要求される。ピット作業で失った１秒を、コース上で取り戻すのは至難の業。それを肝に銘じて作業を行うのだ。緊張もあるだろう、でもいつも通りに…。平常心で常に戦って来たことで、これまで素晴らしい戦績を残してきた TOM’S だが、これに満足することなく、たゆまない努力を続けるチームの将来が楽しみでもある。

◆TOM’S と言うプロ集団

余談を続けさせてもらうと、TOM’S のクルマはいつもキレイな状態であるのをご存じだろうか？キレイであるというのは、細部にまで及ぶ。走行すると当然汚れるタイヤのホイール、そこまでぴかぴかに保つのがこのチームのクオリティ。あるイベントで、ピット作業のタイヤ交換のデモンストレーションが行われた。その際に、観客の方にも体験していただき、その際手が汚れないよう軍手を貸与していた。イベントが終わって、その軍手が汚れているとエンジニアからメカニックが指摘を受けた。タイヤのホイール、汚れていて当然と思っていたが、“軍手が汚れてしまうような仕事を TOM’S はしてはいけないのだ”と、エンジニアは諭すように言った。エンジニア自身もメカニック同様にタイヤのホイールを磨いていたが、職人肌のスタッフの教えのもと、若手メカニックもこうして育てているのだ。翌日のイベントでは、使用後の軍手がキレイだったのは言うまでもない。
メンテナンスにひと手間。ふた手間かけるこのチームのクルマは、トラブルが起きにくいことで知られている。手間をかけている分、異常が起きた際にすぐに気付くとのことだ。これがTOM’Sの強さの最大の秘密でもある。関係者に聞いたところ、他のカテゴリーでも、使用されているエンジンや、使用済のタイヤもメーカーへ返却される際には、しっかりメンテナンスされた上で返されているそうだ。チームにとっては、それが至極当たり前のことらしいのだが…。

長くなってしまったが、この日は、クルマのメンテナンスも午後７時過ぎで終え、サーキットを後にしていた。